メロディーフラッグ

私と環（たまき）は小学校の頃からの友人だった。
二人とも音楽番組が大好きで、お互いの家に泊まっては一緒にテレビを見ていた。
「清香（さやか）、あのさ」
「何？」
「私、作曲家になりたいな。
清香は私の作った曲、歌ってよ」
そんな話をしたのは何時の事だったろう。
歌うことが大好きだった私は、環の言葉に二つ返事で返した。

中学に入り、私と環は同じ合唱部に入部した。
「これで毎日清香の歌声が聴けるね」
彼女のその言葉に、私は思わず赤面した。
だって、そんな事言われたら誰だって恥ずかしいと思う。
しかも、環は他の部員や先輩が居る前で、そんな事を言う物だから。
その後先輩達に冷やかされたのは言うまでもない。
因みに、誤解の無いように言っておくと、私も環も女だ。
見て取ってそれが解るのに、それでも冷やかす先輩達の言葉にはほとほと困り果てた。
けれど、環と一緒に歌って過ごす放課後は、とても楽しい物だった。
勿論、筋トレとか、歌の練習とか、大変な事は沢山あったけど。
夏休みには合宿も有った。
その時たまたま私が夕食の時に作った料理を、環は凄く気に入ったようだった。
「ねぇ清香、このにんじんの入ったの、なんて言う料理？」
「え？　にんじんしりしりーって言うんだけど」
「へぇ、変わった名前だね。どこの料理？」

「沖縄料理だよ」
　隣の席に座った環と話をする。
そんな何気ない事が幸せだった。

所が、幸せな日々は何時までもは続かなかった。
中学二年の終わり頃、環が両親の都合で引っ越す事になってしまったのだ。
私は泣いた。一人で、部屋で。
環とはずっと一緒に居られると思っていた。
だから余計にショックだった。
彼女は偶に電話するからと言ったけれど、それでも私の不安は消えなかった。
引っ越し当日の日、環は私の家まで来てくれた。
「またきっと会えるよ。
だから泣かないで」
私は環を目の前にして、気が付かない内に泣いていた。
環が私の頭を撫でる。
「大丈夫。私達はまた逢える。
そんな気がするよ」
そうは言われても、寂しさはどんどん押し寄せて来るばかりだ。
何時までも泣きやまない私を見て、環が困った顔をして言った。

「そうだね……ちょっと一緒に買い物行こうか」
「……何で……？」
「また合おうって約束で、お揃いの何か買おう。ね？」
　私は涙を拭って環の服の裾を抓む。
それから、一回だけ頷いた。

　環が私を連れて来たのは隣町の駅ビル。
確かに、私の住んでいる町には可愛い雑貨とかが望めるお店は殆ど無い。環の言う通り、お揃いの何かを買うんだったらここまで来るのが一番手っ取り早い。
　二人で色々な雑貨を見て回る。
「どうしよう、何買う？」
　さっきとは違う感じの困った顔をした環が、お店の壁にぶら下がっている携帯ストラップを見ながらそう言う。
「そうだね、折角だから可愛いのが良いよね」
　私がそう言うと、環がふと視線を手元の棚に落とす。
そこにはファンシーな指環がずらりと並べられていた。

それを見て彼女がにっと笑う。
「いっその事指環にする？」
悪戯っぽくそう言う環の言葉に、私はしどろもどろになる。
「え？　いくら何でも指環は……
なんかエンゲージリング連想しちゃうよ」
「いいじゃんいいじゃん。
それこそまた逢おうって願掛けするんだったら効果有りそうだよ」
……そう言う物かな？
そうは思ったけど、そう考えるのなら指環が良いような気もしてきた。
私と環でああでもないこうでもないと言いながら指環を選ぶ。
結局二人が選んだのは、カットされたガラスで蝶をかたどったモチーフの付いている、華奢（きゃしゃ）な指環。
ちょっと高かったけど、これで何時でも環と一緒に居る気分になるなら良いと思った。

中学三年の一年間は、環が居ない寂しさを残したまま、過ぎていった。
そんな中、私は進路を音楽科の有る高校にしたいと親に言った。
理由は、単純に、私が歌手になりたいから、歌の勉強の出来る所にしたかったのと、音楽関係の進路にすればまた環と会える気がしたからだ。
両親は私が歌手になると言う事に賛成はしていなかったが、音楽科に行く事についてはあまり言わなかった。
ただ一言言われたのは、
「公立の音楽科にしてね」
とだけ。
公立の学校で音楽科なんて無いだろうと思うだろうけれど、運の良い事に、隣町に音楽科と美術科を併設(へいせつ)した公立の高校があるのだ。
その高校自体そんなに古い学校では無いのだけれど、十年くらい前に音楽科と美術科が出来た。
勿論私は、元々言っては居なかったけれど、そこを目指していたので異論はない。

何故私立の方の音楽科ではなく公立の方の音楽科を目指していたかというと、実は大した理由ではない。
私立の音楽科はバス通学だけれど、公立の音楽科は自転車で通える範囲なのだ。
でも、設備も公立の癖にしっかりしてると聞いたし、期待できるのではないだろうか。
何を期待するのかは解らないけれど。
そのような訳で、私は今日も公立高校合格を目指し、苦手なエスペラントの教科書と睨めっこするのだった。

「適性検査？」

進路を決めるために行われた三者面談の時に、突然そんな事を言われた。

なんでも、公立の音楽科に入るには入試の前に適性検査を受けなくては行けないとの事。

内容はこうだ。

一つ目は聴音記譜と言って、単純なメロディを聴いて、それを楽譜に起こすという物。

二つ目は新曲視唱と言って、当日渡された楽譜を見て歌う物。

三つ目に専攻別検査と言う物があって、それは選ぶ専攻ごとに内容が違う。

私が選択しようとしている声楽は、歌唱とピアノだ。

これが全てクリア出来るのか。

クリアできなければ、そもそも受験資格すら貰えないらしい。

思わず不安にある私に、先生はこう言う。

「まぁ、適性検査で落とされる人はまず居ないから」

本当だろうか。

聞いただけでは随分と高難易度な事を要求されている気がするのだが。
一応私は当然楽譜を見ただけで歌を歌えるし、ピアノも弾ける。
ただ、メロディを流されて、それを楽譜にするというのは出来るだろうか。とても不安だ。
　取り敢えず、音楽科に入学するには勉強以外にもやるべき事がある。と言う事が解った。
　それから大分経って受けた適性検査。
こんな物だろうかと思いながら受けてきた。
自分では良くできた方だと思うのだが……どうだろう。
判断するのは高校の先生方だ。
適性検査の数日後、学校の方に結果が届いた。
先生が言うには、適性検査には無事合格。
あとは本試験に臨むだけとなった。
本試験と言っても、私はなんとか推薦して貰える事になっているので、
推薦入試を受ける事になる。
万が一推薦で落ちても、一般入試をまた受けられると言う寸法だ。

そもそも公立の音楽科は、採用人数の半数を推薦で採ると言う事になっている。
なので、結構な人数推薦で採ると言う事は、推薦で受かりやすいと言う事だ。
頑張ろう。